

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 大日南苗香姉

開 会 招 詞 詩編100編1-5節

* 賛 美 歌 3:1 (ソングシート)

1. ちからの主を ほめたたえまつれ わがこころよ、今しも目さめて、

たてごと かきならしつ つ 御名をほめまつれ。アーメン。

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人

のものをむさぼってはならない。

(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 85:1

1. 地にあるものみな、世に住む者みな、すべて主のものなり。主はその基を

大水の上に 据えたまいしゆえに。

共同の祈禱 6 使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。われは聖霊を信ず。聖なる共同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン。

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 沖縄伝道 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 箴言15章23-33節 (旧約聖書1010頁)

コロサイ4章2-6節 (新約聖書372頁)

説教・祈禱 「正しく語るために」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 28:1-2

1. 主よ、命の言葉を与え給え、我が身に。我は求む、ひたすら 主より給う御糧を。

2. ガリラヤにて 御糧を分け給いし 我が主よ、今も活ける 言葉を与え給え 豊かに。 アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 68

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。 アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇陽子長老 (司会・受付 次週：雨宮信長老)

本日 受付 1階：若月学・森永美保執事 2階：加藤良明執事 /ZOOMホスト・録音：大日南信也

次週 受付 1階：古澤迪子・加藤良明執事 2階：佐藤紀子執事 /ZOOMホスト・録音：大日南悠

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ4：2-6「正しく語るために」

祈り一何のため

いよいよコロサイ書も終わりが近づきまして、3章以来の教会への教えとしては最後の個所となりました。ここでは、祈りが取り扱われています。前回の所はどちらかと言いますと、家族、家庭の中でのキリスト者のあり方を教えるところでしたが、今回はそれがさらに広がっています。5節に「外部の人」という言葉があります。教会の外にいる人たちです。日本であればかなり多くの人たち、その人たちと教会と教会に属する一人一人の関係がどうなっているのか、実はそれをつないでいくのが祈りなのだ、こんな見通しを立てることができるのです。わたしたちが祈る、ということ自体は、特にそれが家庭でなされる個人的な祈りの場合は、一見しますと全く自分だけのことのように見えます。けれどもそれは自分だけのことではない、むしろ大きな広がりを持っている、あるいはそのように祈ってほしい、とパウロはこのところで求めているのです。

たゆまず祈る一目を覚ましている

しかも、このところでは、「ひたすら祈りなさい」という命令になっています。このところを聖書協会共同訳では「たゆまず祈りなさい」と訳しています。絶えることなく、ずっと祈っている、そのような命令です。その場合に、当然ですがこれは、生活を全部わきにおいてひたすら毎日祈りに集中しなさい、ということではないはずです。もちろん、一定の時間を取り分けて祈りに集中する、ということはある程度よいこと、あるいはあったほうがよいことです。私自身も毎朝ささやかな時間ですけれども祈りの時を持つように心がけています。しかし、このところという「ひたすら祈りなさい」という言葉は、もう一つの命令である「目を覚ましている」こと、そして「感謝すること」と深くつながっていると私は見えています。そしてこの二つのこと、すなわち、目を覚ましていることと、感謝することもまた別々ではありません。そこでまず、目を覚ましているということについて考えてみます。これは、24時間ずっと眠ってはならない、という意味でないのは当然です。例えば、マタイでは24章の始めの所にイエス様が神殿の崩壊を予告するところから始まって、終わりの時についていくつものたとえ話が続く箇所があります。その所でも命令として「目を覚ましていなさい」と語られています。それに続いて、僕のたとえ話がありまして、主人の帰りをどのようにして待つのか、という話になりさらに十人の乙女のたとえ話になります。そこで問題になっているのは、身体的な眠りではありません。なぜなら十人の乙女たちは皆眠るからです。ただ、賢い五人の乙女たちは主人が来るためのために備えていたのです。

時を用いる？

そこで問題となるのは、この備えているということです。出来事に備えるのです。そして出来事に備えるためには、祈りがどうしても必要なのだ、パウロが言いたいのはこのようなことです。では、そのような出来事とはいったい何のことでしょうか。今日の段落の5節にこんな言葉があります。「時をよく用い」というところです。この場合の時とは、今10時50分になった、説教は11時10分くらいに終わるかな、終わるといいな、というような意味での時ではありません。わたしたちには時々、決定的な時、ということがあります。この時、この人と出会っていなかったら、というような意味での「時」、あの時丁度あの出来事がなかったら、今頃は全く違っていた、と思わされるような「時」です。ここでパウロは、その時を生かしてほしい、と言っています。時をよく用いるとはそのような意味です。チャンスを生かし切るのです。そしてそのチャンスとは、おそらく、自分に対して、質問が来るとき、それも信仰や生き方、といったことについて質問が来るとき、そのような時です。それは必ずしも、無理をして作り出すものではありません。こちらから時をつくってやろうと、手ぐすねを引いているようなものではありません。あとでお話しできると思いますが、例えば3節には「門を開く」という言葉があります。これは、神様が赦してくださる、機会を与えて下さるということです。全く同じようにしてある「時」が私たちに与えられるかもしれないということです。

賢く、知恵をもって

そのようにして巡ってくる時についてそれを良く用いる、そのためには、その時に、尋ねてくる外部

の人たち、まだ信仰を持っていない人たちに対して、賢く振舞ってほしい、というのです。この賢く、というところを、先ほどもお話ししました聖書協会共同訳では「知恵をもって」と訳しています。もちろん、これは、神様から与えられる知恵です。それは例えば3節にあります「キリストの秘められた計画」という言葉で表すことのできる知恵です。ちなみに、この「秘められた計画」という言葉は、すでにコロサイ書の中で何度か登場しました。今日は改めて、1章27節を読みます。「この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。」異邦人というのは、コロサイの人たちのことです。当然私たちもこの中に入ります。このパウロの言葉の勘所は、その秘められた計画とはキリストだ、と言っていること、しかもそれは、あなたの方の中にいるキリストだ、と言っていることです。大げさなことを言う、と思われるかもしれませんが、この世界で最も重要な秘密は、イエス様ご自身であり、イエス様があなたの方の中にある、その事実だ、というのです。そしてその事実がすでに感謝なことです。そのような喜ばしい状態にあることを前提として、このところの賢く、知恵をもって機会を生かすとは、イエス様にあるものらしく振舞う、ということになるのです。そして、私たちが絶えず、祈るとは、このようにしてわたしたちがいつでもイエス様と共に生きていることを確かめる、そのために何気ない普段の生活を祈りをもってなしていく、ということです。

塩気ある人として

そのようにして、祈り備えつつ生きていくときに、神様は不思議な時を、出会いを与えて下さるので。それは、のべつ幕なしにということではなく、むしろ、特別な、あ、これかな、と思えるような機会です。そして、祈りつつ日々を過ごしている人には、そのような時に目の前にいる人に語るべき言葉が与えられるというのです。それが6節後半に言われております「一人一人にどうこたえるべきかわかるでしょう」という言葉の意味です。決定的な出会いには、決定的な言葉が必要です。けれども、その答えもまた、自分で考えるのではなく、神様によって示されていくのです。そのようにして言うべきことがわかるようにされるのです。そして当然ですが、そのような適切な言葉は、塩で味付けされた言葉、快い言葉になるのです。この快い言葉というところは、元々の言葉では「恵みの内にある言葉」です。ほかでもありません、先ほどお話ししたように、イエス様の恵みの内を歩む私たち、それを祈りにおいていつでも確かめている私たち、そのような私たちの言葉こそが、時に適った、塩気の聞いた快い言葉になっていくのです。それは決して私たちの立場を押し付けるのではなく、むしろ、私たちの内に働いている恵みを感じさせる言葉になるはずです。

パウロ達が語るため

しかし、このところでは、私たち一人一人がキリストにあるものにふさわしく語っていく、ということと同時に、もう一つ大事なことが語られておりました。それが3節の言葉です。「同時に私たちのためにも祈ってください」。すでに1章の始めの所でパウロと兄弟テモテという名前が挙がっていました。あるいは、来週の箇所ではそれこそ、パウロと共に働いていた仲間たちの名前が次々に上がっています。例えば7節ではティキコが、9節ではオネシモの名前もあります。これらの人たちは、当時囚われの身だったパウロとコロサイの教会の人々の間を行ったり来たりしていたようです。そのようにパウロの伝道活動は、多くの人たちと一緒にあって行われたものでした。決して一人きりのものではなく、また、一つの教会に限ったものでもありませんでした。エルサレムから始まった教会の働きは、アンティオキアを基地としつつ、小アジア全体に、そしてギリシアへと広がりを見せていました。

戸が開く

そのようなパウロの語りました言葉に例の「戸が開く」があります。その実例として、第2コリントの言葉を読みます。「わたしは、キリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主によってわたしのために門が開かれていました」（二コリ2:12）。これは使徒言行録16章に描かれている、パウロ達が初めて、アジアから海を渡ってギリシアに、即ちヨーロッパ伝道に遣わされた時のことを語った言葉です。ご存じの通り、パウロは、アジアの各地で伝道をしていたのでした。ところが、「み言葉

を語ることを聖霊から禁じられた」（使徒16：6）ですとか、「ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった」（同16：7）というような不思議なことがありました。そして、トロアスの港にいる時に、夢で対岸のマケドニアにわたることを示されたのでした。まさに、パウロ達にとっては、神様が戸を開いてくださって、語ることを赦してくださった、という気持ちだったのでしょうか。しかし、これは、行く先だけの話ではないのです。

秘められた計画を

なぜなら、このコロサイ書では3節に「神がみ言葉のために門を開いてくださり、わたしたちがキリストの秘められた計画を語るができるように」とあります。パウロとのその仲間はプロです。聖書やイエス様についての知識を一通り、あるいはそれ以上に蓄えている人たちです。けれども、パウロは切実に求めているのです。キリストの秘められた計画、それはすでにお話しした通り、イエス様ご自身を知ることですが、イエス様が目の前に迫るように、イエス様の恵みがどれほど素晴らしいかを、しっかりと伝わるように話すためには、天の戸が開かれなければならない、というのです。そして、そのためには、当然自分自身も祈るのですけれども、あなたたちの祈りがどうしても必要だ、というのです。それは現代の教会においても全く同じです。教会は牧師が噺家のようにして語ることで出来上がるものではありません。そうではなく牧師も、信徒も、一緒になって言葉を求めて祈る、正しく語るができるように祈る、祈り備えていく、その先に開かれる言葉、与えられる言葉によって立っていくものです。

正しく語るために

牧師が正しくみ言葉を取り次ぎ、天の扉が開かれて、イエス様がありありと示されるために、また、皆さま一人一人に、不思議な出会いの時が与えられ、そこで塩味の聞いた快い言葉を語って、出会った人にこたえていくために、すなわち、わたしたちが、それぞれに正しく語るために、いつでも必要な物、それは祈りです。目を覚ましてひたすら祈ること、お互いのために祈ること、その中で、神様はきっと私たちに扉を開いて、新しい言葉を与えてくださるのです。

祈り

父なる神様。聖名を賛美します。私たちは、日々の生活に忙しく、落ち着いて祈ることの少ないものであるかもしれません。しかし、あなたは、わたしたちが生活の中でささげます、一つ一つの祈りを聞いてくださる方であると信じます。そのようにして、わたしたちが、いつでも主イエスと共に歩むものであることを確認し、そのような歩みの中で、あなたから正しい言葉を頂き、また機会をいただき、あなたのご栄光を表していくことができますようにお導き下さい。この週の歩みが、あなたにあって確かものとなりますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。